

---

# マリンスノーが見える

汐梨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マリンスノーが見える

### 【Nコード】

N4047L

### 【作者名】

汐梨

### 【あらすじ】

生きる世界が違う、正反対の2人の物語

## 世界

黒、と聞いたなら何を連想するだろうか？  
暗闇？暗黒？絶望？それとも、死？

黒はそうやっていつの間にか暗く悲しいイメージがつけられてきた。  
それはきつと俺の生まれる前から、ずっと。

結論から言わせてもらえば、俺は黒は嫌いではない。黒は何にも染まらなない。自分を保つことができる。何にも囚われず、屈せず、染まらず。勿論、周りの連中はレッドやらイエローやらグリーンやらブルーやら、そんな色が好きなようだった。  
でも、それは染まるだろ。他の何かと混じってしまえば、違うものに。

俺はそういうのがなんだか軽薄で浅はかで、馬鹿馬鹿しいと思われ  
るだろうが、そんな色が好きな奴らをどこか見下して軽蔑していた。  
そんなくだらない持論は子供のころから変わらないのだから、この  
先もずっと、俺が死ぬまでおうなんだろうと思っっている。

今日も1日が終わる。夕日は沈み、辺りが暗闇に「つまり黒に染ま  
っていく。

その様子を見ながら、漆黒の車を車通りの少ない道に止めると、窓  
を少し開けて煙草を吹かした。

「ニコチンが、足りない」

口に出したところで、それに反応してくれる人間はここにはいない。しばらく煙草を吸っていると、控えめに携帯が鳴り出した。

『もしもし？生きてるか、ハル』

「久しぶりだつていうのに、その質問はどうかと思うぜ」

かかってきたのは、俺のよく知る幼少時代からの顔見知りだった。腐れ縁というかなんとかで、大人になった俺たちは今でも交流がある。

いや、交流とは、仕事仲間だということなのだが。

しかしお互いやっていることは全く違うため、毎日顔を合わせて話したり一緒に仕事をする事は無い。だから、最近では会うどころか、連絡をとりあうことも無かった。

『お前が不快に思ったのだとしたら、謝るよ。悪かった。…最近じやあ周りの奴等が結構惨いことになってるから、もしかしたらお前も』

「そんなくだらねえ話なら、切るぞ」

『……電話では話せないことなんだよ。今日、10時、いつものバ―で待ってる。』

いきなり呼び出すなんて、何考えてんだと言ってやるつと口を開いたが、すぐにプツと電話は切れた。言いたいことだけ言いやがってまあ、そっち方が手っ取り早くて良いが。

それに、だいたい用件は分かっている。あいつが忙しい時間割いて呼び出すっていうことはな。

後部座席から真っ黒なキャリーを掴んで、助手席に持ってくる。おもむろにスーツの内ポケットに手をつ込み、ひやりとした硬いものの出す。それは鍵だ。銀色に鋭く光る鍵。そして黒いキャリーを開ける鍵。

鍵穴に差し込み、ゆっくりと回す。ロックが解かれる音が聞こえると、鍵を抜き取りキャリーを開く。

「また、よろしく頼むぜ」

6発詰まった黒く光るそれを胸ポケットにしまつと、俺は車を発進させた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4047/>

---

マリンスノーが見える

2010年10月22日00時05分発行